

資料紹介

「銃を握る文官——イギリス人官吏のクリミア戦争従軍備忘録」

水 田 大 紀

本稿は、Stevenson Arthur Blackwood, 'Crimean Days', *Blackfriars: the Post Office Magazine* (June, 1889, pp.241-250) の全訳である。『ブラックフライアーズ』誌は逓信省官吏の手による非公式の職員雑誌である。一八八五年より全九巻が公刊され、一八八九年の一二月号をもって廃刊となった。後継誌には、『セント・マーティンズ・ルグラン』誌 (*St. Martin's le Grand*)、『ポスト・オフィス・マガジン』誌 (*The Post Office Magazine*)、『クーリア』誌 (*The Courier*) がある。

本文の著者であるサー(ステイブンソン)・アーサー・ブラックウッド(一八三二〜九三年)は、一九世紀後半のイギリスで逓信省事務次官を務めた人物である。『英国人名辞典』によれば、彼はスコットランドに起源をもつ家系の生まれで、名門パブリックスクールのイートン校からケンブリッ

ジ大学トリニティカレッジに進学した後、学位を取らぬまま、一八五二年に首相のジョン・ラッセル卿により大蔵省の官吏に取り立てられた。五四年には志願兵としてクリミア戦争に従軍し、兵站総監補代理としてよく務めたことで、クリミア従軍記章とトルコ勲章を得た。五五年に戦地から呼び戻され、大蔵省資金部門の二級官に昇進した。七四年に逓信省の財務次官となり、同時にバース勲爵士(C.B.、八七年にK.C.B.)となった。八〇年に事務次官に昇進し、その勤勉さとキリスト教者としての敬虔さから、「最も有能で成功した、堅実な公僕の一入」(ブラックウッド夫人)と評された。また非常に背が高くハンサムであつたことから、友人たちからは「美男子(Beauty)」と呼ばれたという。その後、第一名のステイブンソンを省くようになった彼は、一八九一年以降健康を損なうようになり、九三年に悪性の貧血症で死去した。

生前のブラックウッドは様々なチャリティ団体や協会に所属していた。例えば、約三千人の会員がいたとされる郵便局絶対禁酒協会 (Anti-alcohol Post Office Total Abstinence Society) では会長を務めた。

このブラックウッドが従軍したのが、一八五三年から五六年にかけてクリミア半島などを舞台に行われたクリミア戦争である。主にイギリス、フランス、オスマン帝国とロシア帝国との間で争われたこの戦争では、同半島の要衝であるセバストポリ周辺で激戦が繰り広げられた。クリミア戦争については、例えばオーランド・ファイジズ (染谷徹訳) 『クリミア戦争』(上・下) (白水社、二〇一五年・原著二〇一〇年) が当時の状況を詳細に描いている。

さて、近代のイギリス社会では、公僕たる官吏や官僚(いわゆる文官)と軍隊との間に独特な結びつきがあった。そのひとつが文官ライフル隊 (Civil Service Rifles) や郵政職員ライフル隊 (Post Office Rifles) である。文官ライフル隊は、元来は一七九八年に設立され、一八一四年に解散した組織であった。その後、ロンドン在住の文官たちを人材的な基盤に、志願兵部隊として五九〇年に第二ミドルセックス・ライフル隊が設立され、これが文官ライフル旅団と呼ばれるようになった。八〇年には第一ミドルセックス・ライ

フル志願兵団、一九〇八年には第一五大隊ロンドン連隊に再編成され、第一次世界大戦期には二個大隊に拡張・分割されたが、戦後の二一年には第一六大隊ロンドン連隊として再統合された。

一方、郵政職員ライフル隊は一八六八年に志願兵部隊のひとつとして設立され、後には国防義勇軍に位置づけられた。隊員は主に通信省職員や郵便関連会社員から採用され、軍事教練を受けた。正式名称は第四九ミドルセックス・ライフル志願兵団であったが、八〇年には第二四ミドルセックス・ライフル志願兵隊となった。エジプトでのウラービー革命(八二年)や第二次南アフリカ戦争(一八九九―一九〇二年)での同隊の奮闘は高く評価された。一九〇七年の国防義勇軍法を受け、〇八年に志願制の予備軍に位置づけられた結果、同隊は第八大隊ロンドン連隊に改組され、第一次世界大戦にも参加して多数の死者や負傷者を出した。

最後に、本文の史料としての意義について述べておく。ブラックウッドの手による本備忘録は、単なる従軍記を越えて、ヴィクトリア時代における知的エリート層の個人ネットワークの広まりを知る好機を我々に提供してくれている。同時に本文は、公僕と軍隊、公僕と戦争、公僕と帝国主義との関係を考えるうえでも重要な史料であると考えられる。なぜなら

ブラックウッドらのクリミア戦争での経験は、両ライフル隊のような公僕による戦争参加という、後世の動きに影響を与えるものだったのかもしれないからである。この意味で今回の翻訳が、公僕をめぐる今後のイギリス近代史研究の進展に何らかの貢献となれば幸いである。なお本文中の註記は全て訳者によるものである。

参考文献

- Batten, A. G. M (ed.), *The Post Office Militant, 1899-1902, the Anglo Boer War* (Woking, 1981).
Blackwood, H. S. D. M. (ed.), *Some Records of the Life of Stevenson Arthur Blackwood, K.C.B.* (London, 1897).
Knight J., *The Civil Service Rifles in the Great War, 'All Bloody Gentlemen'* (South Yorkshire, 2004).
Merrick E., *A History of the Civil Service Rifle Volunteers, 1798-1891* (London, 1891).
Various, *The History of the Prince of Wales' Own Civil Service Rifles* (East Sussex, New edition: 2015).

S・A・ブラックウッド(著)「クリミアでの日々」

「弟のランドルフが君をロシア人と間違えて撃ちそうになって、まさに危機一髪だったことは知っているかね?」「何年か前にハットフィールドパークでの教練から家に戻る道すがら、我が南ハットフィールド州ヨーマン連隊少佐のモールドン卿が私にいった言葉である。「いや全く、初耳です」と私は答えた。「彼はいつ私を撃ち殺しそうになったのですか?」「おや、君が上陸したときのことさ。アリマの戦い⁽¹⁾の二日後だった。まさか彼はそのことを君に打ち明けていないとでもいうかね?」「おくびにも」と私は答えた。「その話、今聞かせてもらえませんか。なんでまた彼はそんなことをしそうになったのでしょうか?」

すると彼は以下の出来事について語り始めた。その話が少なからず私を面白がらせたことを認めよう。ランドルフ・ケール氏は当時、黒海に配置されたイギリス海軍艦船ブリタニア号に乗船する中尉で、ある日、未だに近隣に潜伏しているかもしれない逸れロシア人どもを手当たり次第に撃つたかなり楽しかろうなと考えていた。そこで彼はライフル銃と部下の水兵をつれて、先ほどの目的のために上陸したのであった。すぐ近くに、道沿いにゆつくりと進むアラバ⁽²⁾の隊列を

発見したのは、彼がここには誰もいないと結論づけ、まさに船に戻ろうとしかけたときのことであつた。そのアラバ隊は、

ロシア人のものだと彼が確信した軍服姿で騎乗する軍人により率いられていた。「万歳！」と彼は思った。「ついに狙いをつける時が来たぞ。この時をどれだけ待ち望んだことか」。

それで彼は道路わきの低木群に身を隠し、荷馬車の一団が徐々に近づくの念頭に、それらが約四〇ヤード^③の距離にきたときに、指揮を執る騎乗の人物の心臓に慎重に照準を合わせた。残り二〇ヤードを切つて、おそらくは命運を決するだろう弾丸を撃ち出そうとしたまさにその時、部下がしゃがれ声で「旦那、後生だから撃たねえでくだせえ、ありやあイングランドの軍服でさあ！」とささやいた。全くもつてその通りで、一日中馬に乗つていなければならぬので目立つてもいたのだろうが、私は将校用のコートと帽子、規則から外れたような旧式のコール天ズボンとナポレオンブーツでもつて、素晴らしくウケのいい格好をまとめあげ、私の幸薄い将校仲間から、あの冬の間中とても羨ましがられていた。しかし確かにそれはケープルがそれまでみてきたイギリスの軍服とは異なっていた。そのうえ彼の目的は（少なくとも私はそうは思わないが）非常に称賛に値するものであつたので、イギリス軍の将校ではなく、コサック兵殿やチェルケス人騎兵、そ

の他どんなものに、彼がその軍服の着用者を思い描がこうと許されていたのである。

やれやれ、彼は撃たなかつた！彼は銃口を下げ、近づいて私を注意深く観察し、近視眼的ではあるが、ようやくロンドンの下宿でよく同輩になつていたヤツだと認めた。もう少しで危うく間違つた人物を撃つところだつたと彼は思った。親切にも彼は私を見逃し、自分の士官室につるすつもりだつたロシア人の頭皮をあきらめて、おとなしく自分の船に戻つたのであつた。先ほどいったように、数年たつて彼の兄が私にその九死に一生を得た話をしてくれたときまで、私はそれを聞いたことがなかつた。しかし私は、そのとき少なからぬ感謝の気持ちでそれを聞いたことを認めねばならない。

近衛旅団を預かる臨時兵站總監補代理（なんて肩書きだ！）であり、それゆえに戦闘には参加しない将校として、私は他の者のように銃弾や砲弾の危険に身をさらす必要はなかつたが、部分的にトルコやブルガリアのものである土地で過ごしたあの二年間（大部分の時期がそうであつたが、特にインケルマン^④での戦闘の真つ只中であつた一八五四〜五五年の悲惨な冬の間ずっと）で経験した危機や労苦、出来事は、不自然なほど、あまり鮮烈な印象としては残らなかつたし、実際、多くのそれ以外のことが私の人生全般に影響を与

えたり、及ぼしたりしている。

例えば、私はアリマ川で過ごしたあの日のことを忘れたり
はしないであろう。我々が前夜に宿泊地としたブルガナクと
川岸を覆うブドウ園——それは対岸を丘状にしたロシア軍の
砲台により、距離を置いて慎重に狙いをつけられたブドウ園
ではあったが——とを区分する、柔らかな芝生を横切らんと
するまさにその時、あの秋の朝の光のなかで全てが輝いた、
肩を並べる三大軍団の輝かしい行軍。そして約三マイル前の
夕食時の休憩場所で交わした、戦友たちとの気のおけない会
話。ああ！彼らはこの世では再び友と語り合えぬ戦友なのだ。
それから前進、対岸の高原からの最初の白煙、前進する我々
の隊列の頭上や最中に加速しながら訪れる砲弾や弾丸のヒュ
ーやブーンという音。間もなく、私はこの戦闘での最初の犠
牲者のひとりと出会うことになった。彼は砲兵将校で、下車
野砲の傍に横たわっていた。後衛に負傷者を運ぶ部隊が次々
と立て続けに我々とすれ違ったし、あちこちで「戦闘能力を
失った」幾多の友人たちを私はみつけた。例えば、第七フュ
ーリア火打ち石銃兵連隊の年少ながら勇敢だったフィッツ
ジェラルド。彼は新兵よろしく橋の傍に座り込み、両足首を
撃ち抜かれたせいで、もはや先には進めなくなつたと呻いて
いた。

煙を透かして時折、着々と勾配を突き進む軽装師団の散兵
をみることができた。その後ろにいち早く続いたのは、前線
に投入されてまっすぐに突き進むライフル旅団、第三三連隊
やその他の連隊、例えばペンティンク將軍の指揮のもと、軍
旗分列行進式での近衛騎兵連隊のパレード時のように一糸乱
れず前進し、進撃しながら壊滅的な炎を届けてまわる、我が
旅団の優秀な部隊や近衛第一歩兵連隊、コールドストリーム
近衛歩兵連隊、スコットランド近衛連隊であつた。ほぼ彼ら
と並ぶように、師団に属するその他の旅団、つまりサー・コ
リン・キャンベルに率いられた第四二（ブラックウォッチ連
隊^⑦）、第七九、第九三高地連隊（全権はケンブリッジ公^⑧）が
突撃し、塹壕からロシア軍の射撃手を駆逐するため、鳴り響
く歓声とともに、彼らは敵陣左中央部にある高台を手中に収
めた。私はそれにどのくらい時間がかつたのか忘れてしま
つたが、最初の一発が放たれてから、ロシア側の銃や兵士で
一杯になった大地で旅団が血塗れで息苦しうに休止し、で
きるだけ多くのフラフラになった動物をラム酒樽で急いで気
付するまで（当時はまだ私は禁酒家ではなかったので、喉が
干上がった戦士たちにとっては何と素晴らしいものだったろ
うか！）、まるでほんのわずかな間だったように思われた。
それぞれの連隊から集まって、熱心に勝利したとはいいがた

い戦闘について議論し、誰がいなくなったのかを確かめようとしていた友人たちから、私は温かい歓迎を受けた。その多くは今も付き合いのある友人たち、グッドレイクや、『相棒』ことアストリー・ボブ・リンゼイ⁽¹⁰⁾(現ウォンティジ卿でヴィ

クトリア十字勲章の受章者)であつた。多くの人がびとが黄泉路を渡つたし、怪我を負つたり重傷を受けたりした者もなかにはいた。例えば、ベンティンク將軍の師団長補佐で足が砲弾に吹き飛ばされ、外科手術を受ける二―三時間の間しか生きていられなかつた哀れなカストや、ミニエー弾⁽¹¹⁾で全ての歯がおしやかになつてしまつたアンズリー⁽¹²⁾(現アンズリー卿)、その他にも少なからぬ人々がいた。

その瞬間や共通した勝利に対する祝い、特別な運命からの逃避といったあらゆる激しい興奮と熱狂の最中で、その光景はひどく悲しいものであつた。こちらでは、ひげのない青年や若い連隊旗手、ほぼ学校を出たばかりの新兵、肺を撃ち抜かれたようで痙攣しながら血を吐いて息を引取らんとしてゐる者たちが横たわり、あちらでは、現世での生活があと数分で終わらんとしてゐる者たちに永遠の命の許しを伝えようと、陸軍の従軍牧師が跪いていた。そして、そこで軍医や医局員たちが負傷部を止血し、辺り一面に横たわる大勢の仲間たちの真つ只中で彼らの有益な技術を慌ただしくふるい

続けていた。一八五四年九月二〇日が喜びと悲しみのあらゆる面で、時が決して拭い去りはしない、我が人生における場面のひとつとして私の記憶に刻み込まれたままであるとしても、それは驚くに値しない。

私が我が友ランドルフ・ケーブルの寛大な配慮で危機を免れたのは、この二日後のことだつた。思えば、バラクラヴァ⁽¹³⁾に向かうためのマッケンジー農場⁽¹⁴⁾までの忘れられない側面行軍が行われたのは、四日目の夕方のことであつた。それは多少風変わりな状況下で私自身が遂行した行軍でもあつた。午前五時頃、私がテントから追い出されたのは、傷病兵満載のアラバ護衛の任に着き、おおよそ七―八マイル離れた海岸で、艦隊からの食糧補給を受けられるだけ大量に受けて戻するためであつた。道中で昼食をとり、気分転換に黒海でひと泳ぎした後、私は日暮れまでにテントに戻れるように祈りながら、のんびり屋のクリミア牛が同意してくれる限りの速度で、荷をたっぷり積載した荷車を曳いて戻つていった。朝方に出した地点にたどり着くと、そこには私を驚かせることが待つていた。

『なんと近衛旅団がみつからなかつた。なぜなら、そこにはいなかったからである。』

背囊や軍用行李、支柱やテント、そしてイギリス軍は姿を消していた。残されていたのは軽竜騎兵団の哨兵がひとり、それが全てだった。私の質問に彼は、その部隊は道に出て数マイルのところにある森の中の細い道を下っていったとだけ答えた。私は道なりに進み、やがて二人ほどの落伍兵に出会うと、これよりも先には進まない方が良いと忠告された。というのは、もし私が実際に角を曲がったなら、私はセバストポリの射程範囲内に入ってしまったことに気付いたはずだったからである。まさに忠告の通りで、約百ヤード前方にはイングランド騎兵とその馬の体が横たわっていた。彼はうつかり出過ぎてしまったのである。私は彼らと運命をともにしたくはなかったし、軽竜騎兵がいつていた小路を木々の間にすぐにみつけると、私に随行してきた兵士一、二名を引き連れアラバを置いていくことを決心した。彼らが私に付き従っていたのは、夜間の必需品を手配するため、できる限り私に同行し、旅団や残りの物資との合流に私が最善を尽くせるようにするためだった。

三カ国（イギリス、フランス、トルコ）の軍隊が一体どのようなにしてあの森林地帯の隘路を何とか抜けていったかは、私にとって未だ謎である。しかし彼らはそれをやってのけたのであり、間もなく私は彼らの後衛に追いついた。兵士たち

の間隙を縫って歩くのは困難な仕事だった。まずはトルコ軍で、オスマン支持国の我々へのいつもの親しげな挨拶である「ボノ・ジョヌイ」のなか、私は多くのトルコ兵をかき分けて進んだ。続いてフランス全軍を通り抜けたが、自身の軍隊の本営に遅滞なく到着する義務をもったイギリス人将校のそれと比べ、彼らのなかで慌しい敬意と尊大な威張った態度の混ざり具合が適度にうまくいっていた。すぐに私はハイランド近衛旅団を預かる同僚将校のロールストンを追い越した。進軍中の軍勢にどかさねはしたものの、彼は何とかして手に入れた、たくさんの瘦せこけたクリミア産畜牛を森の中の小さな空き地で辛抱強く見張っていたのであった。そして夕暮れが迫る頃、私はついに自分がイギリス軍の後衛に辿り着いたことを知った。私は輸送部隊にまで何とか到着したが、休止のときにすぐに私の旅団に夕食を配給できるかどうかはその部隊次第であった。しかし休止はなく、我々は急ぎ立てられるままに前進し続け、夕暮れは夜の暗闇となった。時折、アラバが壊れて道を塞ぎ、その後ろに続く者たち全ての進みを遅らせる原因になったので、牛を外し、積載物満載の車両を道沿いの崖から放り落とすしかなかった。とはいえ、そのような方針には好都合な点もあった。例えば備蓄量を再計算しなければならぬとき、『バラクラヴァへの側面行軍』は

ビスケットや塩漬け豚肉、茶、コーヒーなどに関する食い違いを説明するために最も便利な手段であつた。前衛部隊の奇襲によりメンシコフ大公を⁽¹⁵⁾ほぼ孤立させ、もし私が正しく思い出せるなら、彼の馬車や当人の鞆を分捕ることに成功した森の中心地点をやつとこさ越えた後、我々はチエルナヤ平原に到達し、さらに闇の中を疲れ果てトポトボと歩くこと三〇四時間で橋梁に辿り着いた。そこで牛の留め金を外し、馬を杭に繋ぐと、我々はすぐにアラバの一団に転がり込み、外套に包まって、懸命に働いた者がとつて当然の睡眠をとつた。私は午前四時から真夜中までの間、ほぼずっと馬に乗り続けていたのである。

私の記憶の中で側面行軍の夜に劣らず鮮明に思い出されるのは、一〇月二五日の朝のことである。その日、インケルマン高地の裏手にある平原での絶え間ない野戦砲の砲声とマスケット銃の銃声は、活発な何かが起こっていることを明白に示していた。馬に飛び乗って、チエルナヤの平原を見渡すために高地の縁まで疾走し、ラグラン卿と、下で行われていることをしきりに気になっている多数の英仏軍参謀将校の周りに集う集団に合流するのに、それほど時間はかからなかつた。ロシアの騎兵隊は、急ごしらえの小防塁を半ダース占拠し銃器を鹵獲していたトルコ軍を駆逐しはじめたところであつた。

続いて彼らは、さだめし「奇襲」で同地（我々の兵站基地）を奪取すべく、防衛されてはいるがイギリスの歩兵一個連隊しか配置されていないバラクラヴァに向け、その道を迅速に進軍した。しかしその一個連隊とは第九三高地連隊であつた。連隊の指揮権を持っていたわけではないが、作戦遂行にあつてはいた将校は、他ならぬサー・コリン・キャンベル准将であつた。街への入り口を監視する半マイルかそこの防衛は、今では歴史的に有名な「シン・レッド・ライン」⁽¹⁷⁾へと拡大の一途をたどつていったのである。トルコ軍に容易に勝利できたことで意気軒昂になつていた大勢のコサック兵たちは、全力突撃で守備隊に襲い掛かつた。コサック兵たちは、高地連隊兵が準備しているらしい、取るに足らぬ抵抗を粉砕することとをほとんど疑つていなかった。しかし彼らは重要な点を見逃していた。敵方の騎兵隊を確実に作戦が遂行できる範囲内に来させると、ここぞというタイミングで、一列に並んだ全てのライフル銃から銃火が撃ちだされ、そして瞬時に空になった鞍や騎手を失つた馬、混乱し気力のくじけた一般のコサック兵たちの姿は、バラクラヴァの守備隊がいかに忍耐強く、いかに任務に忠実なのかを物語るものとなつた。

二度目の突撃は試みられなかつた。体勢を立て直すべく、ロシア騎兵は後退準備に移つたが、平原を横断しきる前に、

彼らは自身の横腹に数個の竜騎兵連隊とスコッツ・グレイ連隊で構成された我らが重騎兵旅団を見出した。彼らは旅団に對峙せざるを得なかったので、それで密集隊形に加わるべくとるりと転進し、当然行われるのであろう突撃に備えた。そこでは二つの軍勢が、まさに我々が集合した丘の麓でじつとしていた、というか差し当たつての待機をしていた。間もなく、軍隊ラッパの音や号令を下すしゃがれた叫び声とともに両軍が徐々に歩調を上げ始め、互いに全力でぶつかりあつた。強烈な興奮がやつてきた。数瞬の間、乱闘と衝突とに巻き込まれ（おお、しかし何と長く感じられたことか）、どちらの側も勝利を得られたようにはみえなかつた。しかし実際には、どっちつかずの状況は長くはなかつた。すぐに歴然となつてきたのは、イギリスの軍人や軍馬の際立つた優勢さがコサック騎兵を圧倒しつつあり、至る所でスコッツ・グレイ連隊の白馬か、その騎手や竜騎兵の緋色の軍服のどちらかが高らかに現れる様子をみられたことであつた。そして我々の騎兵隊が迅速に再形成され、追い打ちがかけられるにつれ、ロシア軍の敗北は決定的となり、彼らは死傷者を見捨てて、ただちに自軍と勝利者との間に取りうる限りの距離を取つた。その日に関しては勝利だつた。なんという勝利の雄たけび！なんという歡喜を迸らせた歡聲！それらが、私のいる英仏軍の將

校や兵士たちの一団から湧き上つた。フランス人がイギリス人に取り縋り、祝福と歡喜の熱のうちに彼らを抱きしめていた。悲しきかな、その日の午後には異なる光景を目の当たりにすることとなつた。それは、ロシア人に鹵獲された銃器を取り戻すため、輕騎兵旅団が高潔で勇敢だが、無駄で破滅的な突撃（それに携わつた者以外にはあまりに非現実的すぎてみておれず、野營地にいた我々の大半には翌日まで全く知らされなかつた突撃）を行つたときのことである。

インケルマンの戦いについて、私は多くを語れない。そのわずか数日前に私の馬が私もうとも転んだせいで、私は足首をねん挫していた。そのため、あの忘れられない日の間ずっと、私はテントのなかに押し込められていた。実際、もしロシア人たちが攻撃に成功し、我々の第一、第二師団が野營する高地の占有権を得ていたら、馬に乗ることもできず、さりとて走ることもできなかつたので、自由の利かない状態の私が逃げおおせる見込みはほとんどなかつただろう。

しかし状況の一部は、私の記憶に極めて鮮明に残っている。その前日の朝は特に気分がいい朝だつた。旅団の仲間のうち数人が私のテントで食事をとり、兵站部にある全ての資源が彼らに素晴らしい食事を出すために使われていた。我々は真夜中頃に解散したのだが、最後まで残つていたうちの一人が

コールドストリーム近衛歩兵連隊の年若いグレヴィルであった。彼はロンドンでの生活における私の重要な盟友で、旧友たちや昔の出来事は彼のこととともに陽気に語られるような人物であった。そして我々が隊に戻ったときには、計画は実行されるべく仕上がっていたのである。ああ何たることか！翌朝六時まで、彼はロシア人の銃剣で繰り返し突き刺され、砂囊で作られた射撃台近くに横たわっていた。

どんよりとして霧がかった朝、それが一月五日という日曜日の朝であった。非常に不愉快なことに、思いがけず小ぬか雨がテントの裂け目から入り込んできてしまい、早朝から自身の体を温かく乾いた状態に保とうと奮闘していたので、私はマスケット銃の銃声がいつもの時折ある銃撃とは全く違っていることに気づかざるを得なかった。轟音は途切れなかった。音量を増しながら音が延々と続けば続くほど、どんどんと近づいてきているように私には思えた。一方、部隊が急いで通り過ぎていき、日の光が明度をあげていくにつれ、イギリス軍の連隊に加えてフランス軍の連隊の幾つかも前線に送り込まれていくのを私はみた。激しい戦闘が行われていることは明白で、間もなくかなりの負傷兵が、次々と私のテントが立っている場所近くの道を横切り始めるようになった。足を引きずってでも自分で歩くことができる者もいれば、大

半はこちらだが、担架に乗せられている者もいた。テントの扉付近にある折り畳み式のベッドに横になつていたので、私は何が起こっているのかについて、あちこちから情報の切れ端を集めることができた。

誰もが多くのことを語ることはできなかった。なぜなら、あの霧雨が立ち込めた朝、下生えに覆われ峡谷が交差するインケルマン高地の起伏ある大地について、例え戦闘における自身の役割以上のことを知っていたとしても、それはごくわずかであったからである。まさに「兵士の戦い」であった。統率力や用兵手腕の出る幕はなかった。我々は奇襲を受けたのであり、連隊や中隊が相次いで全速力で行動を開始し、各連隊や中隊、分隊がいる場所を固守して、ロシア軍の重装歩兵大隊による嵐のような猛攻にできる限り抵抗すること以外にやるべきことはなかった。指揮官でさえその戦闘について明瞭な説明を加えるための関連資料を十分に得られたのは、全てが終わった後でようやくのことであったし、実際、二十余年の後にキングレイクの素晴らしく写実的で魂を揺さぶるような物語が出版されるまで、交戦の域を越えて、あの日、至る所で悲惨な至近距離での戦闘が行われたことをほとんど誰も知らなかったのである。二日後に丘を越え、私の馬がその間をほとんど進めないほどまだ死体が折り重なって横たわ

った、砂囊で作られた射撃台（背後に水路を持つ、斜面側に投げられた二三個の堡籃）を見たとき、その戦闘中、どうやって生き延びられたかを把握するのは困難だった。

その小さな射撃台の内外に、ロシア軍とコールドストリーム連隊とが何度も何度も交互に押し寄せた。同連隊のハーヴィ・タワー¹⁹や、背の高いイングランド産のハンター種²⁰に騎乗していたことで有名だった近衛歩兵第一連隊のバーナビー²¹、その他の幾人かは不死身かと見紛うばかりであった。そして同盟国のフランス軍に勇ましく援護されながら、将校たちに卓越した武勇でもって先導されることで、ついにはイギリス軍人の強情さが戦いに勝利し、全軍の安全が左右される、ロシア軍が奇襲で領有したいと無分別にも考えた高地を確保したのであった。しかしそれは本当に、途轍もなく高くついた勝利であった。あの日、幾多の友を私は失ったのである。

もう一つの出来事を話さずに回想を終えることは、私にはできない。私は永久に忘れるべきなのだろうか？黒海上で猛威を振るい、クリミア半島の断崖に無情に衝突する嵐のなかで、冬用の備蓄と衣類を積載した、数えきれぬほどの艦船が沈没し、その損失がかなりひどいものであったことが証明された日、そして本当に多くの勇敢な人士が死んでいった日でもある、あの悲惨な十一月四日のことを。野営地にいた

我々にとって、実に不快で惨めな一日であった。しかし、あの岩だらけの海岸沿いで起きていたことについて、我々が知ることのできたことはほとんど何もなかったのだ。

例をみない勢力を持った突風雨が地震のように屋根布を震えさせている間、私は夜中にテントのロープや杭を補強するために何度か起き出し、それが済むと再び微睡に落ちていた。新手でもっと強烈な突風が 대기に関する全ての懸念を吹き飛ばし、最低限の着衣のまま、折り畳み式ベッドから霧が立ち込める黎明の薄暗がりのなかに私を放り出したのは、私の傍で寝ていたシリア人従者を大声で呼ぼうとした、ちょうどその時のことだった。私がみたのは励ましにはなりそうにないこと、例えばほとんど立っていないテントと自分の服の後を追いかける裸の戦士たち、黒い毛皮帽や野営用の薬缶、空樽を含め、本当に風が影響を与えられるあらゆるもののハリケーンが猛烈な勢いで通り過ぎ、擲弾兵や砲兵を九柱戯のようになぎ倒し、混乱に次ぐ混乱を生み出しているところだった。近くでは（現在イギリス関税局の副局長を務めている）私の同僚将校のハーバート・マレー²²がシャツ姿のまま、剥き出しの支柱に必死にしがみついていた。そのみが彼の天幕といさつきまで快適だった住居の残骸であった。こちらの方で同じく最も原始的な服装になっていたのは師団将校のロール

ストンで、彼は片手でセバストポリ湾に吹き込んでくる風から勘定書を確保し、もう片手で軍隊金庫を抱え込もうと必死に努力していた。まずは笑うべきか、それとも泣くべきかの判断に苦しんだが、みつけることができた唯一の避難所、つまり倒壊した我々のテント近くにあつた、積み重ねられた塩漬け肉樽の下で縮こまりながら、ひどい寒さと猛烈な風、打ち付けるような雨のせいで、すぐに惨めな思いが優勢になった。あの日私たちがどう過ごしたのか、私は覚えていない。どうやって衣類を調達したのかさえ、謎のままである。しかし最長の一日とはいえ、時間と砂時計はすり減っていき、そしてようやく、長く疲れた不幸な一日は終わり、師団の主計総監補で、ついでに言えば尊敬すべきスコットランドの測量監督官の兄弟がいるA・カニング大佐⁽²³⁾の（ほぼ唯一倒れずに残っていた）快適な大テントに、我々は夕食を取りにいったのであった。

しかし私はそういった記憶により多くの容量を割くわけにはいかなかった。ブルガリアでの夏や、インケルマン高地で過ごした数か月の冬、旅団を生かし続けるには辛うじて間に合うだけの糧食を雨と泥のなか、バラクラヴァから日々運び上げるほとんど絶望的な試みと、小アジアで畜牛や馬を購入するために春の黒海を渡る爽快な船旅、木々の生い茂る海岸

沿いやバイダル溪谷での騎馬旅行や行楽の記憶。これらやその他多くの思い出が、静かな晩に時折、湧き上がってくる。それらは、当時はその意味を十分には認識していなかった場面や時間である。しかしそういった記憶はその背後に深い傷跡を残した。生と死という現実とは先立つては気づかない性質を帯びているものであり、目新しさや刺激への愛情以外の理由で遠征への志願兵となることはなかった気楽で喜びを愛する若者は、いろいろな意味で、別人になってイングランドに帰ってきた。情け深く与えられた保護と一八五四年のクリミア出征で私が悟った教訓に対して、私はあまりにも感謝することはできないのである。

註

- (1) クリミア戦争時の一八五四年九月二〇日にフランス・イギリス・トルコの連合軍とロシア軍との間で行われた戦闘。アリマはクリミア半島の南西部を流れ、黒海に流入するアリマ川周辺の地名。
- (2) トルコやロシア南部などで用いられた二輪もしくは四輪の粗末な荷馬車。
- (3) 一ヤード＝〇・九一四四メートル。四〇ヤードはおよそ三六・四メートル。
- (4) クリミア半島南西部の地名。クリミア戦争では一八五四年に同地で英仏軍がロシア軍を破ったことで知られる。
- (5) Sir Henry John William Bentinck (1796-1878)。クリミ

ア戦争時の少将で、戦後にバース勲爵士を授与された。

- (6) Sir Colin Campbell (1792-1863)。イギリスの陸軍元帥。バース勲爵士。一八五八年に初代クライド男爵となった。半島戦争やアヘン戦争などで連隊や旅団を指揮し、五七〇五八年にはインド大反乱の鎮圧に尽力した。クリミア戦争時にはバラクラヴァへのロシア軍の攻勢を撃退した。
- (7) イギリス陸軍スコットランド高地連隊の通称。黒い制服を着用していたことに由来。
- (8) イギリス王ジョージ三世の孫で、ヴィクトリア女王の従兄にあたるジョージ王子（一八五〇〜一九〇四年）のこと。
- (9) Gerald Littlehales Goodlake (1832-1890) のことか。彼はクリミア戦争時には第一大隊のコールドストリーム近衛歩兵連隊に名誉少佐として従軍した人物で、インケルマンの戦いで功績をあげた。これにより最高の戦功章であるヴィクトリア十字勲章を受章した。最終階級は中将。
- (10) Robert James Loyd-Lindsay (1833-1901)。クリミア戦争時はスコットランド近衛連隊に大尉として所属し、アリマの戦いやインケルマンの戦いでの活躍によりヴィクトリア十字勲章を受けた。中将だった父の跡を継ぎ、後年には准将まで昇進した。
- (11) フランスの軍人クロード・エティエンヌ・ミニエー（一八〇四〜七九年）により発明された銃弾。着弾時の衝撃が大きくなり、敵に大損害を与えることができた。
- (12) Hugh Amesley (1831-1906)。第五代アンズリー伯爵。職業軍人として一八五〇年代より南アフリカでの戦役に参加し、アリマの戦いでは先述のように頸を粉々にされた。六〇年にスコットランド近衛連隊の大佐となり、七四年に爵位を継いで貴族院議員となった。
- (13) クリミア半島にあるセバストポリの南東の村で、黒海に臨む海港。クリミア戦争の古戦場として、テニソンの詩「軽騎兵旅団の突撃（遙かなる戦場）」にも詠われた。セバストポリはクリミア半島南西部で黒海に面する港市。クリミア戦争や第二次世界大戦の激戦地として有名。
- (14) セバストポリ近郊にあるマッケンジー高地の地名。
- (15) Aleksandr Sergeyevich Meshnikov (1787-1869)。ロシアの軍人。クリミア戦争では將軍としてロシア軍の指揮をとり、アリマやインケルマンで英仏軍に破れ、セバストポリの防御に失敗した。
- (16) Fitzroy James Henry Somerset, 1st Baron Raglan (1788-1855)。クリミア戦争時にイギリス軍の司令官を務め、セバストポリの港湾封鎖を指揮した。セバストポリ陥落の数か月前に赤痢と鬱病で健康を損ない死去した。片足の人のためのサマセット鞍は彼の名に由来。
- (17) 歩兵で構成された第九三連隊がロシア軍を撃退した戦闘を指す言葉。当時の歩兵の制服の色からこう呼ばれた。
- (18) Alexander William Kinglake (1809-1891)。イギリスの旅行作家、歴史家。一八六三〜八七年にかけて出版された全八巻の『クリミアへの侵略』(*The Invasion of the Crimea: Its Origin, and an Account of its Progress down to the Death of Lord Raglan*) は彼の傑作として名高。
- (19) Harvey Tower (生没年不明)。コールドストリーム連隊で中尉、後に大尉を務めた人物。クリミア戦争での活躍によりフランスのレジオンドヌール勲章を受章した七四六名のイギリス軍人のうちの一人。

(20) 雌馬とサラブレッドの交配による半血種の強健な獵馬。

(21) Edwyn Sheard Burnaby (1830-1883)。イギリスの軍人、地主。一八四八年に同連隊に入隊し、五五〇五七年にはイギリス軍のイタリヤ人部隊で准将を務めた。八〇年より父親の跡を継ぎ、北レスターシャー選出の保守党議員を務めた。最終階級は少将。

(22) Sir Herbert Harley Murray (1829-1904)。スコットラン

ド人植民地行政官。一八五二年から官僚となり、後には関税局局長も務めた。九五年にはニューファンドランドの総督に就任し、同年にバース勲爵士となった。

(23) Arthur Augustus Thurlow Cunynghame (生没年不明) のことか。同人物であればクリミア戦争でレジオンドヌール勲章を受章したイギリス軍人のうちの一人。